

審査の結果の要旨

氏名 橋本 貴美子

本研究は欧米と比較し精神病院平均在院期間が長い日本で、精神科患者の精神病院への再入院を予防するため、精神科患者の精神病院再入院率、及び再入院と関連する要因を明らかにすることを試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 本研究の精神病院退院後 30 日と 90 日以内の再入院率は、4.1%と 10.8%であり、欧米の再入院率と比較し、低かった。欧米では精神科患者の精神病院在院期間が短いため、十分に精神症状が安定する前に、精神病院から退院させられていると考えられる。
2. 精神病院への再入院に先行する入院期間中に身体的に拘束された精神科患者は、再入院することが示された。症状が不安定になりやすい精神分裂病、分裂病型障害及び妄想性障害患者が拘束されやすく、再入院しやすいと考えられる。今後、どのような精神分裂病、分裂病型障害及び妄想性障害患者がどのような状況下で拘束されているかを詳細に検討する必要がある。
3. 家族などによる社会的支援が精神科患者の再入院を予防していることが示された。これは、精神科的診断毎に共通して示された。
4. 過去の精神病院入院回数が多い精神科患者は再入院しやすいことが示された。
5. 精神病院在院期間が長い精神分裂病、分裂病型障害及び妄想性障害患者は、再入院しやすいことが示された。長期間精神病院にいることによってコミュニティでの社会的支援が消耗し、再入院しやすいと考えられる。

以上、本論文は精神病院より退院した精神科患者を対象に、精神病院への再入院率を調査し、再入院と関連する要因を検討した結果、日本における精神科患者の精神病院への再入院率は欧米と比べ低く、再入院に先行する入院期間中の拘束経験、家族などによるソーシャルサポートの欠如、過去の精神病院入院回数の多さが再入院を予測する、また、精神分裂病、分裂病型障害及び妄想性障害患者では、精神病院在院期間の長さが再入院を予測することを明らかにした。精神病院在院期間が欧米と比較し長い日本で、一部の地域ではあるが、一定期間に精神病院から退院した精神科患者全てを対象に、精神科患者の再入院

率及び再入院と関連する要因を検討した初めての研究であり、精神科患者の再入院の予防に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。